

津山の食料産業クラスター推進概況

～つやま新産業開発推進機構の取組み～

1 津山の食料産業クラスター推進概況

岡山県では、2005年11月に設立されたおかやま食料産業クラスター協議会を中心に食料産業クラスターの取組みが推進されている。この協議会のメンバーでもある「つやま新産業開発推進機構」では、津山地域における産業振興をサポートし、食料産業クラスターの取組みを推進している。2007年8月8日、つやま新産業開発推進機構を訪れ、その取組みの概要を伺った。

1.1. つやま新産業開発推進機構とは

つやま新産業開発推進機構は、津山地域の産業振興支援、コーディネートを行うことを目的に、1996年4月に

設立された津山市の任意外郭団体である。行政や商工会議所の従来の産業振興施策とは異なる切り口で、意欲・能力のある企業・事業者をグループ化や産学官民連携をツールとして、新技術・商品開発から販路開拓まで一体的にサポートしている。

津山市役所職員3名（商工観光課2名、農業振興課1名）、産業活性化アドバイザー3名（工業・農業・マーケティング各1名）、臨時職員1名の計7名が常駐し、ステンレス産業クラスター、ユニバーサルデザイン産業クラスター、食品産業クラスター、農業（あぐり）クラスターの4つの分野で、クラスター形成を推進している。商工観光課と農林振興課が連携して、津山地域の産業振興を支援している。



つやま新産業開発推進機構ホームページより

1.2. つやま新産業開発推進機構の設立経緯

1975年に中国自動車道が開通し、大阪まで2時間程度になったことによって、工場誘致が進み、開通以来、100社程度の製造業が集積した。1990年には、製造品出荷額も2,000億円（開通以来4倍以上の増加）を超え、内陸型工業都市となった。しかし、バブル崩壊によって、誘致企業の倒産、近畿地方への回帰に加え、国際競争力にさらされる中、出荷額も減少に転じ低迷期となった。そのような中、1995年に津山地域産業育成ビジョンが策定され、津山市の産業振興の方向性を、外部からの工場誘致に依存しない経済的に自立できる内発型産業育成型にシフトした。地域の既存企業の連携によって、他地域と差別化できる新しい産業構造を目指そうと、産学官連携を支援するための組織として、つやま新産業開発推進機構が設立されたのである。

1.3. 4つのクラスター

まず、最初に取り組んだのが、60数社が集積しているステンレス加工業（食品加工機械製造、飲料水充填機械製造等）を津山地域のリーディング産業として育成支援することであった。60数社のステンレス加工業の中から加工工程が異なり、技術レベルの高い企業を選定し、技術補完による共同受注グループ「津山ステンレスネット」（会員企業8社）を結成し、育成支援を行ってきた。従来の行政支援の方法とは異なる「選択と集中」による支援活動である。この津山ステンレスネットの取組みが、ステンレス産業クラスターの中核となっており、コーディネートをしているのは、つやま新産業開発推進機構の藪木伸一 産業活性化チーフアドバイザーである。「津山工業高等専門学校と地域産業界等との交流を深めることにより、地域産業の発展に寄与するとともに、津山高専の教育研究の振興を図ること」を目的とし、1995年8月に発足した津山高専技術交流プラザ（会員企業27社）の事務局を、つやま新産業開発推進機構が担うなど、津山工業高等専門学校との連携も図っている。

次に、つやま新産業開発推進機構が目じたのは、地場産業の中から強い技術、商品、サービスを持つ企業によるオンリーワンの産業集団の育成で、津山地域の食品加工業、繊維・縫製業、木工業を支援することであった。津山市にある美作大学と連携し、「産学官民連携による新事業・新商品開発を目指し、津山地域の産業発展に寄与すること」を目的に、1999年7月に美作大学技術交流プラザを発足している。美作大学の生活科学部食物学科、福祉のまちづくり学科の協力を得て、食品分科会（つやま夢みのりグループ）、繊維・建築分科会（ユニバーサルデザイン研究会）を設け、新商品開発を行っている。この取組みが、食品産業クラスターとユニバーサルデザイン産業クラスターの中核となっており、コーディネートをしているのは、近藤浩幸 産業活性化アドバイザーである。つやま夢みのりグループでは、地元産農畜産物の加



つやま新産業開発推進機構の産業活性化アドバイザー（左から工業振興支援の藪木伸一氏、農業振興支援の坂本定禱氏、マーケティング支援の近藤浩幸氏）



つやま新産業開発推進機構に常駐している津山市役所職員（左から商工観光課工業振興係の灰原佳典主任、農業振興課の小坂田裕造主幹、商工観光課工業振興係の岡本洋平主事）

工による新商品開発を、ユニバーサルデザイン研究会では、ユニバーサルデザイン（障害を持っている人、持っていない人を分け隔てない全ての人のために使いやすいデザイン）の衣料品、木工製の住宅備品の新商品開発を行っている。

もう一つのクラスターである農業（あぐり）クラスターは、2005年2月の市町村合併（加茂町、阿波村、勝北町、久米町と合併）を契機に、農業が基幹産業である旧町村部の活性化を図ることを目的に始められた取組みである。2006年2月に「津山リーディングあぐりクラスター推進委員会」を設立し、農工連携による農業者のアグリビジネス展開の支援を行っている。この取組みが、農業（アグリ）クラスターの中核となっており、コーディネートをしているのは、坂本定禱 産業活性化アドバイザーである。現在、はいいぶきグループ、自然薯グループ、加工品開発グループの3つのグループが形成されている。はいいぶきグループでは、近畿中国四国農業研究センターが開発したγ-アミノ酪酸（ギャバ）生成能力の高い巨

大胚米「はいいぶき」の実証栽培と試験販売・加工食品開発を行っている。加工品開発グループでは、生産者自らが加工開発し販売する事業化の支援を行っており、これまでに、ジェラード、ビーフジャーキー、ドライフルーツトマト、レーズン等の試作が行われている。農業（あぐり）クラスターは、つやま夢みのりグループとの連携も図っており、将来的には食品産業クラスターと一緒になるかもしれないという話であった。

つやま新産業開発推進機構では、津山地域に潜在する資源を生かしたこれら4つのクラスターの形成を目指して、専門分野の違う3人コーディネーターをそれぞれに配置し、支援活動を行っている。

2 つやま夢みのりグループの取組み

ここでは、4つのクラスターのうち、重点的に取材したつやま夢みのりグループ（食品産業クラスター）の取組み概要を報告する。

2.1. 新商品開発の方法

つやま夢みのりグループには現在19社の地元食品企業が参加している。会員企業が、生産者や他企業、美作大学との連携によって、新商品開発を図っている。その連携をコーディネートするのが、つやま夢みのりグループの事務局を担当しているつやま新産業開発推進機構の役割である。

開発された新商品は、つやま夢みのりグループ会議の場で試食会を行い、会員の評価を受ける。会議では地元食品企業、美作大学食物学科の先生（学生含む）、生産者（農畜産業者）、消費者（モニター）、行政関係者等が参加して、出席者の3分の2の賛成が得られた場合に、「つやま夢みのり」商品として認証され、統一ロゴマークをつけて販売することが許されるという仕組みである。①消費者に受け入れられるか、②地場産の物をできる限り取り入れているか、③自信を持って安心・安全な商品と言えるか、の3点を審査基準としていたが、2007年より認証審査制度を改正し、認証期間を2年間とし、更新する制度とした。外部審査制度を導入（マーケティング、ブランディング、バイヤーなど7人による審査）し、市場性など11項目について審査する制度となった。よりマーケティングの観点を取り入れ、売れる商品づくりを目指そうという制度となった。

2.2. 「つやま夢みのり」ブランド

「つやま夢みのり」のロゴをつけて販売している認証商品は、現在26アイテムある。それらの認証商品は「つやま夢みのり」のWEBサイトに掲載し、商品の紹介と販売を行っている。また、更なる販路拡大を目指し、「つやま夢みのり」ブランドの商品群として、東京のマッチングフェア等にも出展している。2007年4月に開館した愛媛県西条市の食の情報発信施設「食の創造館」でも、



「つやま夢みのり」ブランドの商品群

（写真：つやま新産業開発推進機構からの提供）



こだわり食品フェア2008（場所：東京ビックサイト）における「つやま夢みのり」商品の出展の様子

先進的な商品開発事例として、展示販売されている。

3 今後の展望

津山地域の食料産業クラスターは、つやま夢みのりグループの取組みを中心に推進されている。地元農産物を利用した加工食品のラインナップも増え、現在7,500万円の売上げ（出荷額）を上げているそうである。新商品開発から販売に至る道筋があり、今後更なる新商品開発が生まれる下地ができていく。ただし、ある程度のヘビーユーザーはいるが、それが伸び悩んでおり、これまで以上に販路拡大を図りたいといった課題も持っているようである。地域の農畜産業者や消費者をこれまで以上に巻き込み、地域全体でのブランド化を目指していくという方向性を示していた。

【お問い合わせ】

つやま新産業開発推進機構

〒708-0022 岡山県津山山下92-1

津山圏域雇用労働センター内

TEL 0868-24-0740 FAX 0868-24-0881

（文：社団法人食品需給研究センター 藤科 智海）